

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	1814年の定期刊行物に見られるロマン派論争について
Author(s)	佐藤, 弓葛
Citation	フランス文学 , 8 : 50 - 65
Issue Date	1966-07-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040878
Right	
Relation	



1814年の定期刊行物に見られる ロマン派論争について

佐藤弓葛

1814年と云う年は欧州連合軍のパリー侵入（3月）、ナポレオン帝政の崩壊（4月）、ブルボン王朝の復活（5月）等政治的大変動のあった年だけに、文学作品は余り発表されていない。その中で、特に古典派とロマン派の論争の中心となる作品は Alexandre Soumet の “Les Scrupules littéraires de Mme la baronne de Staël, ou Réflexions sur quelques chapitres du livre De l’Allemagne” (Paris, Delaunay 出版, 1814年10月22日) と歴史学教授 Antoine Jay が王室学院 Athénée で11月25日に講演した論文の二つである。Soumet の作品はロマン派擁護の代表作品であり、Jay のは古典派を代表するものであるが、これらについては次回に語ることにして、今回は同年に刊行された主なる新聞雑誌の論評を究明することによって、両派の動向を探ることにしよう。

本論で取扱うのは1814年であるが、それに先立つ前年の1813年にはフランスロマン主義の発生に最も大なる影響を与えた3大作品即ち Sismondi の “De la littérature du midi de l’Europe”（5月—6月）と Mme de Staël の “De l’Allemagne”（10月イギリス版）と G. Schlegel の “Cours de littérature dramatique”（12月, Necker de Saussure によるフランス語訳）が発表された。

擬古典文学で固められていた帝政下のフランス文学界はこの三大巨砲の攻撃を受けて慌てだし、防禦手段を取らざるを得なかった。と同時に自分達の将来に対する不安を感じさせられた。また政治的見地から見ても、当時のナポレオン独裁政治はもはや欧州連合軍の力の前では立ち直るための突破口を見出すことは不可能であった。こうした状況のもとに1814年に入ったのであるから、フランスの古典派には既に相手をむかえうつ力量はなく、ただ今までの古い武器を使って防禦に努めるのみであった。それは1814年に刊行された新聞雑誌を調べて見れば、如実にわかる。

Périodiques principaux parus en 1814

① Journal de l’Empire (anti-romantique)

Dussault; articles sur Sismondi (5回) Nodier; sur Schlegel (1)

② Gazette de France (anti-romantique)

Sévelinges; sur Schlegel (3) Esménard; sur Sismondi (3)

③ Journal des Débats (anti-romantique)

* “Portrait d’Attila” de Mme de Staël Dussault; sur Staël (4)

Nodier; articles divers (4) Aimé-Martin; sur les œuvres de Ducis (2)

- Féletz; sur A. Jay (1) Hoffman; sur Schlegel (3) (1815)
- ④ Spectateur
* Malte-Brun; sur Staël (2) A. Jay; sur le genre romantique (anti-romantique)
- ⑤ Mercure de France (impartial)
* “Portrait d’Attila” de Mme de Staël Marcel de Serres; sur Staël (2)
* Mlle V. Cornélie de Salm; sur Staël (1)
- ⑥ Journal de Paris (anti-romantique)
Charles-Joseph Colnet; sur Staël (3)
- ⑦ Magasin Encyclopédique (romantique)
* Millin; sur Staël (1)
- ⑧ Quotidienne (anti-romantique)
articles sur Staël (3)
- ⑨ Journal Général de France (impartial)
John Smart; “L’Anglais à Paris (14) * Deleuze; sur Staël (3)
- ⑩ Nain Jaune (anti-romantique)
“Traité d’Alliance” Sur Soumet (1815 jan.)

(註) 例えば②の中で Sévelinges; sur Schlegel (3) とあるのは、Sévelinges が Schlegel の作品 “Cours de littérature dramatique” に関する論評を 3 回に亘って掲載したと云うことである。また * 印はロマン派の立場にあるものに付けてみた。

以下内容にふれて、多少説明を加えて見る。

① の Journal de l’Empire はナポレオン治世中、御用新聞となり、3 月下旬ナポレオンの失墜と共に廃刊し、4 月からは元の名称である③の Journal des Débats に再び改名して発刊された。古典派の指導的評論家 Dussault (当時45才) の論評は Sismondi の “De la littérature du midi de l’Europe” に関するもので、前年の 9 月 29 日に第 1 回をかき、第 2 回もやはり前年の 12 月 29 日で、第 3 回は 1 月 14 日、第 4 回は 3 月 11 日、最終回の第 5 回は 3 月 21 日に発表されている。第 5 回までの論評全部をまとめると可成りのものになるが、第 3 回までと第 4、第 5 の内容には明らかに Dussault の Sismondi に対する態度に変化が現れたのが見られる。それは Schlegel の「演劇論」が出版されたために生じた Dussault の異国人に対する反抗精神によるものである。3 回までの論評では批判もおだやかで、Sismondi の博識と教理にふれ、外国文学を迎えるのも悪くはないが、フランスの文学的伝統は守らねばならない。また「Sismondi の文体は énergique だが、pur で clair な点に欠けている。」と指摘しているが、好意的な批判であった。ところが第 4 回、第 5 回では激しく攻撃し、二人の外国人 Schlegel と Sismondi はフランス文学に戦を挑んでいるが、

ロマン派は一徒党にすぎない。Aristote の権威と goût に反抗しているが、何等の principes も règles も持たないから、一つの Doctrine として認めることは出来ないと糺弾する。“La littérature romantique n’a ni règles ni lois, et flotte, au gré de tous les vents et de tous les caprices, sans rencontrer une ancre sur laquelle elle puisse s’appuyer et se fixer: or, quelles seraient les funestes conséquences d’une pareille probabilité? Qu’est-ce qu’une littérature sans principes? Qu’est-ce qu’un art sans règles?”

Dussault は第5回で unités を守り、文学に於ける理性と良識と goût の正当性を述べる。そしてロマン派の思想に新しいものは何もない、ただあるのは激しい調子だけで、mauvais goût もはなはだしい「夢想的幻想、嫉妬ぶかい望み、高慢な主張」を喚きたてる。従って彼等の genre は genre fou であると決めつけ、Sismondi の本文からは galimatias や sottises や style grotesque な箇所を選び出して皮肉を浴びせている。そして最後に“mais félicitons M. de Sismondi de nous avoir révélé des sources si nouvelles, si inconnues, si extraordinaires de volupté littéraire! j’achèverai, dans un sixième et dernier article, d’examiner son livre, et je ferai mes adieux à MM. les romantiques.”と結んだが、政変のため最終回は発表されなかった。

Charles Nodier (当時34才) はナポレオン治世下に劇評を確立した学者兼ジャーナリストの Geoffroy に代って、3月から演劇欄を担当した。しかし Nodier は外国文学と exotisme に好奇心の強い作家であるから、この新聞の風潮である Geoffroy, Hoffman, Dussault, Féletz の保守的態度とは一線を画している。3月4日の Schlegel 論に於いて、彼は新しい社会に於ける文学・言語の進展を確信する。だが、異国の批評家のロマンティック教理は好まない。“Ce n’est pas ma faute s’il a trouvé à propos de créer cette division artificielle, et de supposer la possibilité d’un beau qui fût autre chose que le beau des anciens. Je dis que le genre romantique est une invention fausse, et c’est ce que j’en puis dire de mieux.”と云って古典の伝統を重んじる。従って Schlegel の美の相対的理論や、古典派文学とロマン派文学の人為的区分を Nodier は好まない。しかし Shakespeare 劇に見られる規則からの解放は認め、しかも“Shakespeare devient classique”と云う。要するに、ロマン派が演劇に革命をもたらすことを否定しながらも、それが避け得られないのではないかと見ている。そこには Nodier 自身の精神がよくうかがわれる。Nodier は La Muse française 誌 (1824年5月) に“Adieux aux Romantiques”の詩を発表しているが、これとても伝統芸術に逆らわぬ様ロマン派の若き友たちに忠告しているのである。

② Gazette de France は anti-romantique な新聞であるが、1814年の論評では可成り中立に近い立場をとっている。Charles Louis de Sévelinges (当時47才) が Schlegel の「演劇論」について書いたのが1月20日と2月5日と3月16日の3回に亘ってであるから、前記の Nodier の Schlegel 論よりも先きである。

Sévelinges は小説や歴史作品をかく文人で、特にドイツ文学に精通しており、1804年に

は“Werther”の翻訳なども出している。彼はまた *Mercure de France*, *Mercure Etranger*, *Journal de Paris* にも執筆していた。第1回では作品を公平に分析することを述べ、まず Necker de Saussure の翻訳の序文を引用し、異国批評家の *agression* とか *représailles* と云う言葉に注意を寄せている。また公平な批評家の態度として“*Avant de juger, apprenez à connaître*”を強調し、Schlegel が作品を書くに到った思考を明らかにするために、「演劇論」の最初の部分を引用している。第2回では Schlegel の古典劇に対する考察について述べている。即ちギリシャ劇の確立から、ローマがそれを真似、更にフランスがその忠実な継承者になった点、そして Voltaire まで降りて来る。第3回の評論では特にギリシャの三大悲劇作家について語り、ついで Schlegel のフランス劇に対する判断を検討し、La Harpe や Abbé Barthélemy の見解と Schlegel の見解の相違点を指摘して、Schlegel の能力と観察の正しさを認めている。Sévelinges は極めて保守的な人物であったが、ドイツ文学に精通していた関係で、Schlegel の作品に対しては好意的で、フランス人読者に偏見をなくして判断する様にすすめている。

Jean-Baptiste Esménard (当時45才) の Sismondi 論は3回(3月22日、23日、28日)に亘って行なわれた。Esménard はナポレオン皇帝軍の旧将校で *Mercure de France* にも寄稿していた。第一回目では Sismondi の作品は Schlegel, Dièze, Bouterwek の影響のもとに生れたものであること、また Sismondi のスペイン語の知識が弱いことを指摘している。第二回目の論評では、Esménard は美の相対性と云うロマン派教理に対して古典美学の *règles* の普遍性を強調している。つづいて Calderon について語るが、ここでは Sismondi を離れて、Schlegel の文章を直接引用して論じている。そして Schlegel の意見に異論をはきみ、Sismondi が Schlegel の誤謬を是正しないことを非難している。最終回では再び Sismondi のスペイン語訳の不充分さを述べているが、しかし全体的に見れば Sismondi を高く評価していると云えよう。そして Sismondi や Schlegel の作品がフランスの若い世代に与える影響を考え、低調な古典派が次第に大衆から引き離されて行くことを気にかけている。この点は Dussault, Féletz, Hoffman と違って Charles Nodier に近い見方をしている。

③ 4月から帝政以前の名称に戻った *Journal des Débats* の出だしは当然反ナポレオンの態度を示した。そのため、4月4日には Chateaubriand の“*De Bonaparte et des Bourbons*”の抜粋が掲載され、4月29日に出た Mme de Staël の「ドイツ論」の断章“*Portrait d'Attila*”はナポレオンを Attila に譬えたことと非難され、1810年「ドイツ論」発禁の主因になった箇處で、もともと保守的な新聞がナポレオンと訣別するためには云え、カトリックでも王党派でもない Mme de Staël の「ドイツ論」の抜粋を発表したことは奇妙な現象である。これは要するに、社会状況がそれ程までに混乱していたことを物語っている。

少し落ち着くと Dussault の「ドイツ論」批判が4回（6月18日、21日、7月2日、18日）に亘って発表された。第1回の記事はさ程攻撃的ではなく、彼女のそれ以前の作品「コリンヌ」や「文学論」とも比較し、彼女の好きな文学的 *perfectibilité* や、北方文学と南方文学の区分にもふれている。しかし「ドイツ論」の文体に対する皮肉も明らかに感じられる。“Par exemple, dans ce dernier ouvrage, c'est le mot *pétrifier* qu'elle affectionne: ce mot s'y reproduit fréquemment... des opinions *pétrifiées*, des principes *pétrifiés*... et il est vraisemblable que les principes *pétrifiés* d'Aristote, d'Horace et de Boileau résisteront, comme des rocs inébranlables, à tous les assauts des systèmes modernes.”

第2回では、Mme de Staël の文学教理を攻撃する、そして彼女の *perfectibilité* に対する矛盾を指摘している。“Elle doute de la perfection, et elle parle de *perfectibilité* ! S'entend-elle bien elle-même? Comment donc l'une pourrait-elle exister sans l'autre? Qu'est-ce qu'une *perfectibilité* sans perfection? Il est vrai que cette *perfectibilité*, rêvée par Mme de Staël, est indéfinie; c'est-à-dire, une *perfectibilité* qui tend à la perfection, mais qui n'y conduit pas, et qui n'y arrive jamais; semblable à la supposition de ces lignes de la géométrie qui s'approchent sans cesse les unes les autres, et qui jamais ne se joignent; quel abus de l'esprit de système! Ferme-t-elle les yeux pour ne pas apercevoir la contradiction manifeste qui se présente ici dans les termes?”

第3回目には彼女がドイツ哲学から学んだ哲学的教理を取り上げ、彼女の *enthousiasme* に立脚する宗教哲学に対して、Bossuet の正統合理主義を引合いに出す。また彼女が尊敬する Kant の影響は精神生活に危険なものであるとする。最終回では Mme de Staël の思想を放棄して、作品の中に見られる女性的な面の良さと、彼女の知識と深い考察について賛辞を送っている。文体には欠陥があるが、それでも女性の筆に書かれたものとしては、しっかりしており、男らしくもあり驚嘆に値することも述べている。ドイツ人 Schlegel やスイス人 Sismondi より遙かにフランス人である Mme de Staël に対する Dussault の批判はおだやかなものであったと云えよう。事実 Mme de Staël は、Schlegel が Molière を非難するのに反し、「ドイツ論」の中で Molière 喜劇の優秀性を確信している。こうした点に Dussault は或る程度好意を示している。

Charles Nodier の4回（6月19日、8月29日、9月6日、13日）に亘るクリティックは“Ossian” “Eugénie”, “Andromaque”, “Athalie” について述べている。“Ossian” の様な作品が現れるのは *décadence* 時代の徴候であるとする。政治革命がかかるロマン派の不健全な作品を助長するので、ポナパルトにも気に入られるのである、と云う。“Ossian” とナポレオンと革命とロマン派を彼独自の見解で結びつけている。第2回目の Beaumarchais の“Eugénie” では、作品について語ることより、Racine, Molière の古典劇に見られる恋愛心理描写と、激しい情熱をむき出しにするロマンティック的表現について語っている。ドイツのドラマに見られる表現はサーカスの見世物同様野卑で不道徳である、と見ている。

次の言葉が Nodier の考えをよく表現している。“Je suis loin de contester l’influence du genre romantique; je l’ai éprouvée dans toute sa puissance, et elle doit agir d’une manière presque certaine sur l’organisation délicate des jeunes gens et des femmes; mais il y a des spectacles qui agissent encore avec plus de pouvoir sur la foule cruellement curieuse qui ose en supporter l’horreur, et le genre romantique est un intermédiaire monstrueux entre les spectacles du Cirque et ceux des Gémonies. Ce n’est pas seulement pour la cause d’Aristote et de nos principes littéraires qu’il faut repousser l’invasion de cette maladie germanique, c’est pour celle de la saine morale et des règles sociales qui font la base et la garantie des Etats.”

第3回の“*Andromaque*”, 第4回の“*Athalie*”では古典芸術の偉大なる美と、根本的教理は真実と理想の巧みな配分にあると云うことを説明して、Schlegel の「演劇論」を反駁した古典美学擁護論である。とりわけ Racine 劇の完璧性を称え“Ce grand poète est peut-être de tous les classiques celui qui a pris ses héros dans l’ordre le plus universel, et dont les ouvrages sont par conséquent destinés à plaire plus longtemps et plus généralement à toutes les nations et à tous les âges.”と云い、また Corneille, Molière などとも比較して Racineこそ“le vrai, le pur classique”であると述べている。

L. Aimé-Martin(当時28才)の Ducis の作品に関する論評は6月24日と7月29日の2回に亘って発表されている。Institut の会員 Jean François Ducis の劇作集が出版された機会を捉えて書かれたもので、Ducis は Shakespeare を詳細に研究・翻訳し、Shakespeare 劇の特色を学び取り、しかもフランス古典劇をくずさず、自分でも作品を書いたので、Aimé-Martin はそのことにふれ、作家の良き性格を称えている。つづいて、Voltaire 以後のフランスに於ける演劇の動向及びドイツロマン派の影響を述べ、先輩たる Dussault, Nodier のロマン派に対する非難を妥当なものとして支持する。

第2回目では“*Hamlet*”を取扱って Ducis の学び取った方法を例証して、Schlegel 理論を反駁する。Aimé-Martin は Ducis の“*Hamlet*”を次の様に云っている。“Son *Hamlet* est encore celui de Shakespeare, mais de Shakespeare ennobli et conservant toujours la dignité tragique.”ここにはフランス古典派が Shakespeare 劇を受けとめる、その態度が示されている。Schlegel 的 Shakespeare 観を承諾し得ないフランス古典派の姿勢である。

Mme de Staël と仲の悪かった Féletz (当時37才) の A. Jay の論文に対する論評は11月26日で、Jay が Athénée 学院で講演した“*Discours sur le genre romantique*”についてのレジュメであり、Jay の論文に見られるロマン派攻撃の思想に同意しているが、Féletz にすればもっと激しい攻撃を望んでいる様に思われる。Jay の論文については次回に試みる。Hoffman の「Schlegel 論」は翌年の1月(5日, 7日, 13日)に入るので、ここでは省略する。

以上 Journal des Débats が古典派の牙城であることは、その執筆者の名を見るだけでも

容易に理解出来る。

④ デンマーク生れのフランス人地理学者兼評論家の Malte-Brun (当時39才) が発刊した雑誌 *Spectateur* は翌年5月に廃刊となるが、1814年の5月号と7月号で Mme de Staël の「ドイツ論」を取り上げている。5月号では「或る新聞社の事務所での会話」と云う形式で、冗談まじりに書かれており、5月21日 Nicole で発刊された「ドイツ論」のフランス版に対するフランス批評界の当惑を鮮かに描いている。Mme de Staël と云う人物は豊かな知識・才能にめぐまれた女性であるが、作品は余りにドイツ崇拜主義で、しかもその作品が五党派の第一人者である Nicolle から出版されたのであるから、ほめて良いのか非難すべきものなのか、皆目わからない。ほめれば Goethe や Kant を崇拜することになるし、非難すれば“Portrait d’Attila” でナポレオンを暴君として攻撃した彼女を否定することになる。そこに嘲笑の神 Momus が顔を出し、“Croyez-moi” mes chers enfants, dites tous les deux tout ce qui vous viendra dans la tête. Soyez d’accord, soyez en contradiction, cela nous est fort égal; mais faites-nous rire, fût-ce à vos dépens.” とあざける。

ところが、7月号では Malte-Brun は前回とは全く態度を変え、「ドイツ論」讚美を打出す。しかも激しい口調でフランスの伝統主義を攻撃し、Mme de Staël の文学的自由主義の表明を高く評価し、外国作品に対する豊富な知識はフランスの génie を産みだすに役立つものである。Mme de Staël 自身、フランスの古典劇作家、ならびに彼等の傑作を充分認めているが、決してドイツ作家に盲目的賛辞を与えているのではない。ただ彼女は下地の異なるドイツ文学の研究はフランス人に新しい、豊かな鉅脈を見出させる点で必要であるとしている、と Malte-Brun は述べている。更に Malte-Brun はドイツ文学とフランス文学の関連を述べ、Mme de Staël が打ち建てた二つの文学間の隔たりには異論を述べている。また Malte-Brun は「いわゆる genre romantique」の起源についても、こう語っている。“Le caractère soi-disant romantique, ou opposé aux règles classiques, ne s’est développé en Allemagne que depuis l’an 1770. Ce goût moderne que Mme de Staël et les Allemands appellent romantique, et que nous examinerons sévèrement dans la suite de notre analyse, n’est autre chose que l’alliance de deux genres d’imitation des Anglais et des Espagnols, quant aux règles de la poésie dramatique et des livres sacrés, ou des Orientaux quant au style.”

Malte-Brun は Mme de Staël の自由な高度の思想をフランスの hommes d’esprit で理解し得るものが、ごく少数にすぎないのではないかと懸念している。新聞の記事を見ても、「ドイツ論」を読まずして批判している者が見られるが、かかる者こそ Mme de Staël から学ぶべきであると結んでいる。しかし、この Malte-Brun は *Journal des Débats* にも1806年以来執筆している古典派で、12月には古典派の代表とも云い得る A. Jay のアテネ学院における講演を、この *Spectateur* 誌に掲載している。古典派・ロマン派いずれに同意しても、反対しても同じことだと云った Momus 神に従ったとも思えないのであるが、

⑤ *Mercur de France* は中立の立場を取っている雑誌で、5月号6月号に掲載された Marcel de Serres (当時32才) の「ドイツ論」についての論評は彼女の卓越せる才能を称えたものである。しかし彼女の万事を自分の方式で割り切ろうとする、*esprit de système* と *enthousiasme* に対する過剰をいましめている。例えば、ドイツ人の器用さの欠如などを Mme de Staël は述べているが、それは彼女の誤りであると云っている。

Serres は最初法官になり、後に地理学と経済学を研究して、地歴の大学教授になった人で、「オーストリア帝国」論 (1814年—15年) を著わした時、ドイツを研究しているので、Mme de Staël の「ドイツ論」に強い関心を寄せたのである。Serres は6月号で、「ドイツ論」の欠陥を指摘しようとして、調べれば調べる程作品が第一級のものであることを痛感する。「思想に於いても *plan* に於いても、新しくこれ程顕著な作品は久しい以前からフランスには無かった」と称えながら、文学論に移る。ドイツ文学が余りにフランスには知られていなかったが、Mme de Staëlのおかげで知ることが出来る。Schiller の作品 “Marie Stuart” などにはフランス劇に見られない偉大さと感激にみちた場面がある。(Marie を裏切って Elisabeth の徹心を買うために Marie の恋人 Leicester に語りかける Marie の態度と言葉)。つづいて、Mme de Staël の取扱ったドイツ作家 Wieland, Klopstock, Lessing, Winkelmann, Goethe 特に Schiller について強調する。更に *classique* と *romantique* の区別にふれ、またドイツ哲学に対する彼女の解説は優れたもので、自分が説明すれば、ドイツ哲学はもっと *raisonnable* なものでなくなり、フランス人をまどわすことになる恐れがある、と述べている。Marcel de Serres の特色は Mme de Staël の「ドイツ論」を純然たるドイツ案内書として見ているので、フランスの政治情勢との関係などは一切考慮に入れていないことである。

Mercur de France の8月号に発表された、いま一つの Mlle V. Cornélie de Salm の「ドイツ論に関する若干の考察」も Mme de Staël を高く評価している。

Mlle de Salm は、世間では「ドイツ論」に書かれている変った表現を探し出し、それ等を集めて Mme de Staël を非難するけれども、彼女の優れた思想や正確な力強い表現の方が遙かに多いので、つまらないことを云々せず、作品を大局に立って見るべきである、と云う。また最後の *enthousiasme* については5月号、6月号の Serres の見解とは違って、Mme de Staël の考えに完全に同意して、賛辞を送っている。そして「ドイツ論」はやがて雑誌新聞を通じて、全面的に普及するであろう、と述べている。ナポレオンが退位して4ヶ月以上もすぎ、反ナポレオン熱も下火となると「ドイツ論」は反古典的で、反フランス的作品と見做される様になって来ただけに、Mlle V. Cornélie de Salm の論評は特色あるものであったと云えよう。

⑥ *Journal de Paris* では Charles-Joseph Colnet (当時46才) が6月9日、24日、7月3日の3回に亘って、Mme de Staël の「ドイツ論」の批判を行ない、彼女を理解している様に思えるが、明らかに古典派の立場に立っている。

第1回では「ドイツ論」の序文について、Colnet は Mme de Staël と帝国政府との軋轢を語り、第2回では作品がフランス的でないと言う非難に対しては作品の弁護を試みている。即ち Mme de Staël も良きフランス人であり、作品も立派にフランス的であるのに、何故官憲がフランス的でないと言うのか、その理由が解らないと Colnet は云う。Mme de Staël は第1巻を書くにあたって、フランスの良さを認めて書いているし、フランス女性の会話の巧みさも指摘している。しかも隣国の生活・風習も紹介してくれているのであるから、作品を非難することは当を得ていない。と云っている。しかし7月3日の第3回目、Mme de Staël の文学的意見にふれると、今までと違った態度で厳しい批判を下している。“Votre Boileau, nous disait souvent M. Mercier, a perdu la poésie française. Jamais nous n'avons voulu le croire.” (註 Mercier は時代的に受け入れられなかったが、フランスロマン派の先駆者の一人で、彼の作品“Satyres contre Racine et Boileau” (1808年) も“Néologie” (1801年, 2巻本) の序文も激しい古典派攻撃の作品で、彼は Shakespeare や Schiller を称えている。) と切り出し、終始古典派の優位を述べ、Mme de Staël の genre romantique も受け入れない。Schiller の“Marie Stuart” に異論をはさむ。Goethe の“Faust” も chaos intellectuel とみる。愛を語る際のロマン派の言葉の奇妙さも指摘している。また Mme de Staël はドイツの喜劇が高い水準に達していないので殆んど語っていない。彼女は Tieck の“le chat botté” をほめているが、これは擬人法にすぎない。Klopstock をほめているが、これも読むに価するのは Messiaide の僅かな部分にすぎない。結局、Mme de Staël も遠からずフランス精神に立ち戻るであろう。Boileau の主張する raison と sagesse を嘲る者も Boileau の正当性を認める、と云う結論を出している。

⑦ 雑誌 Magasin Encyclopédique の6月号には Aubin-Louis Millin (当時55才) の「ドイツ論」評が掲載された。Millin はドイツの哲学者達を研究しているフランスの Institut impérial の会員であったので、ドイツ文学に対しても何等の偏見も持っていなかった。従って Mme de Staël の「ドイツ論」についても、科学者の厳しさを持って作品の各部に詳細な分析を行ない、大変好意的な評価を下した。ただし、Millin にとっては美学の争いや、古典派とロマン派の諸問題は興味がないらしく、Mme de Staël のとった立場に味方もしなければ、反対もせず作品をドイツ案内書と見ている。この点では⑤に挙げた Marcel de Serres に近い。

⑧ 新聞 Quotidienne は Journal des Débats 同様古典派の牙城で、Mme de Staël の「ドイツ論」について、皮肉たっぷりの批判を対話形式で3回(6月30日, 7月4日, 29日)に亘って行なっている。執筆者の名は不明であるが、最終回には M. V. と署名されている。

この問答形式は効果的だが、可成り悪どいやり方でもある。問を自分で適当に作り、答えを「ドイツ論」から勝手に引き出して来るのであるから、たまったものではない。漫才

の中で荘重な言葉を語ると、その言葉は忽ち笑の種となると云うやり方である。例えば第1回の記事に見られる次の様な問答である。

D. Qu'est-ce que l'Allemagne ? R. Ce n'est pas une nation compacte.

D. Et le bon ton ? R. C'est une puissance aristocratique.

D. A quoi sert la plaisanterie ? R. Elle allège le poids de la vie……

D. Définissez-moi le génie. R. Le génie est une douleur……

D. Que faut-il pour peindre en poésie ? R. Il faut avoir souffert dans sa langue……

D. Que remarquez-vous dans la société en France ? R. Une grande pédanterie de frivolité……

万事この調子である。

第2回目の *Seconde Leçon* では、パンションの女の先生が女学生達にやさしい文章で話すという形式をもちいて、Mme de Staël の文章を巧みに引用して *Seconde Leçon* を殆んど全部埋めている。

「皆さん、ドイツの人達は普遍性から生れる寛容なる精神を持っていますが、我々フランス人は人を馬鹿にしたり、冷笑したりすることが好きです。Voltaire は prince des moqueurs です。」「次の様なフランス人になってはいけません。qui pensent et vivent dans les autres, dont le défaut et la grâce est la dissipation d'âme.」

「皆さんが社会に出たら、いつも次の金言を思い出さない。 “Le culte de la beauté par excellence est un souvenir du ciel.」

「皆さんは余り Klopstock を知りませんかでしょうが、彼の “Messiade” を読みますと、on croit entrer dans une grande église, au milieu de laquelle un orgue est fait entendre; on respire comme un parfum de l'âme.」

「Schiller と云えば、jamais il n'entre en négociation avec les mauvais sentiments; il seconde le règne de la divinité sur la terre.」

「こん度は、皆さん、簡単な。はっきりした定義を少しみることにしましょう。L'enthousiasme est l'encens de la terre vers le ciel; les montagnes sont des tribunes naturelles; la rime est l'image de l'espérance et du souvenir; l'ode est l'apothéose du sentiment; la nature est tout à la fois penseur et poète; un poème épique n'est point l'ouvrage d'un homme, les siècles y travaillent.」

こうした引用の仕方を見ると、この筆者こそヴェールを被った prince des moqueurs と云いたい。

7月29日に出た最後のレッスンでは、第1回と第2回を合せた形式で、Kant や Fichte などドイツ哲学者を取扱っている。そして最後に Voltaire の “Temple du goût” に書かれている次の言葉を引用して結んでいる。

「若し諸君が書物を書くに当って、
グー
 雅味の神と一緒にいたいと思うならば、

パリーで書物を書きなさい。
ドイツなどに行きなさるな。」

この様に *Quotidienne* 紙の「ドイツ論」批判は辛辣だが、飽迄皮肉まじりの冗談で終始している。そして古典派陣営に涼風を吹き込んだ。しかし古典派がこの程度の反撃しか出来なかったと云う、限界の一面を見せている様にもとれる。

⑨ *Journal Général de France* はこの年の9月に創刊された。その発刊趣意書の中で「政治に対すると同様文学にも討論の自由性が必要であるから、我々は *école classique* も *école romantique* も同等に取り扱う。そして両派は各自のシステムを自由に擁護すればよい。我々は弁護士に過ぎない。また時には単なる目撃者に過ぎない。読者が裁判官になればいいのである。」と云うことを述べている。そして9月1日から12月迄14回 John Smart と云う署名で、「パリーに於ける英国人」“*L’Anglais à Paris*” と云う表題のもとに逐次発表している。John Smart の本名は Joseph Nicolas Barbier-Vemars (当時39才) で、古典学の教授で、*Annales des Arts et des manufactures* (1807—1814) の編集もしていたが、後にはフランス王室図書館の conservateur になった学者で、中立の立場を取りながら、フランスとイギリスの風習の比較をしたり、演劇では Stendhal より遙かに先に、Racine と Shakespeare を対立させて検討している。また三単一に対する反駁を再燃させてみたりもする。それに対する反論の手紙も掲載している。

また、この *Journal Général de France* 紙では Deleuze (当時61才、医者で動植物の magnétisme の研究者) が Mme de Staël の「ドイツ論」について4回(10月16日、31日、11月19日と翌年の1月16日) 論評を書いているが、これは当時にとっては珍しい Mme de Staël 賛美論である。もっとも同じ10月22日に、次回に述べる Soumet (当時26才) の単行本が賛美論として出版されているが、61才の老人がロマン派の作品をこれ程ほめているのも極めて稀なことである。

第1回で彼は「ドイツ論」を読み、「文学・哲学の討論で、これ程私の関心を惹いたものはいまだかつて無い。」また、どうして世人もジャーナリスト達も、彼女の作品は「文学的異端で、そこには rêveries や sophismes しか見られない」と云う非難には驚かざるを得ないので、自分は別のやり方で「ドイツ論」の優秀なることを説明したい、と述べている。そしてルイ十四世時代の古典文学の完全なる発展、それ以上に出られなくなって来た点、それより生ずる方向転換、Buffon, Chateaubriand の出現、しかしこの二人の天才の後につづく模倣者達の作品はみられない。また J.-J. Rousseau の作品はフランスでは最もきびしい検閲の対象となり、抑制される。Mme de Staël はこの Rousseau の心情を受けつき、理性にも心にも想像力にも同時に語りかける。自分はドイツに行ったこともなく、ドイツ作家の作品は翻訳でしか読んだことがないが、Mme de Staël は彼等の教理を適確に擲んでいる様に思える、と Deleuze は述べている。

第2回では、「ドイツ論」の第一部の内容分析にかかる。そして特に Mme de Staël のフランスに対する見解を正当づけている。「強いて欠陥を云えば、それは彼女の思想が豊富であり過ぎる点であろう。」と述べている。だが Mme de Staël の文章に対する goût の欠如、単調さ、不明瞭、独断と云った他者の多くの非難に対しては反論し、彼女の文章に見られる第一級の美が凡ての欠陥をあがなう。また「フランス伝統の名作にみられる noble simplicité は無くても、驚くべき明敏と精神の公平さが認められる。」とも云っている。

第3回目では、「ドイツ論」の第二部を中心にしてドイツ文学と、Mme de Staël の古典派文学とロマン派文学の見解について語っている。

ドイツ文学の特色の明示、フランス人がドイツ文学を正当としない理由の説明、最も著名なドイツ作家の portraits、荘重な詩の構成に対する検討、ドイツ人の演劇構成と古代人・近代人のそれとの比較、歴史・批判・小説・芸術論にみられるドイツ作家の仕事、ドイツに於ける最も独創的な作品の部分訳等が スタール夫人の仕事であったことを詳しく説明している。続いて古典派とロマン派の問題を取り上げる。そして Mme de Staël はフランスの古典派作家をも充分尊敬しているので、フランスの国の栄光を傷つける様なことは何一つしていない、ただドイツ文学にみられる様な新しい源泉もむげに退けないことを望んでいるのである、と Deleuze は弁護している。Deleuze は11月19日のこの論評を「第三回で最終回」と記しているが、翌年1月16日に第四回を發表して、「ドイツ論」の第3部ドイツ哲学について補足している。そして“L’alliance d’une philosophie éclairée avec une religion sincère est le caractère distinctif de Mme de Staël.”と結んでいる。

Deleuze と反対の立場にある論文が同じ Journal Général de France 紙の12月22日に發表された。それは Louis Simon Auger の「外国人達がフランスで演じた役割について」“Sur le rôle que les étrangers ont joué en France”と云う論評である。作品自体は Necker から Napoléon に至るまで、途中 Anacharsis Cloots や Marat にふれ、政治的立場から書いているのであるが、これは文学に当てはめることも出来るのである。と云うのは、実はこの Louis Simon Augerこそ10年後の1824年に古典派とロマン派の決戦が演じられた時、アカデミーフランセーズの会長になっていた彼が、1824年4月24日のアカデミーの会議でロマン派文学攻撃の有名な講演を行なったのである。これに対する Stendhal の反撃が“Racine et Shakespeare No II ou Réponse au manifeste contre le romantisme prononcé par Auger”であることも、ロマン派論争研究における重要な事項であることはよく知られている。

⑩ 最後の Nain Jaune 紙の12月30日に掲載された「同盟条約」“Traité d’alliance”と云う記事は実に面白い、しかも当時のロマン派の動向を巧みに描いている古典自由派が放った一矢である。

「古典派とロマン派の戦は新旧論争同様、多くのインクを流させている。我々は両交戦

軍の公的報道を正確に伝えることに努力しよう。ところで、ここにロマン派軍隊の一脱走兵によって、我々にもたらされたロマン派諸国同盟条約がある。」と云う書き出しで、如何にも公平をよそおった形式だが、全くの架空で、念の入った同盟条約である。

同盟国はドイツ、オーストリア、スイス、オランダ、英国、スエーデン、プロシア、ポルトガル、スペイン、イタリアの文学強国で、敵国は全欧州を自国の詩的芸術の法規下に隷属させ、時と場所とムルスに関する *unités* の規則で服従させようとするフランス文学共和国である。同盟諸国は9ヶ条からなる条約を批准・署名するために全権委員を任命している。その委員は前述の各国の他に、個人では Mme de Staël, B. Constant, Kotzebue, Schlegel, Sismondi の5名が選ばれている。多少長くはなるが、René Bray も“Chronologie du Romantisme”の中で「最も興味ある古典派の反撃は Nain Jaune のそれである。」と云っているぐらいであるから、その9ヶ条をここに紹介しよう。

第一条

条約締盟 文学強国はその名称を「ロマンティック連邦」“Confédération romantique”とし、その標語として「古典派に死を」“Mort aux classiques”を掲げる。

第2条

ロマンティック連邦はフランス文学共和国が自然的境界内にとちこめられてからでなければ、筆をおかないことを誓う。

第3条

フランス文学共和国の自然的境界と見做されるのは、16世紀に同国が限定されていた限界である。即ち Corneille, Boileau, Racine, Molière の如き野心的才能によって、その限界が文学上から見たヨーロッパの端にまで拵げられた以前である。

第4条

ロマンティック連邦を形成する諸強国は行動を開始し、それぞれの立場で一切の筆力を、また必要なる場合は大学生の筆力をも動員せしめることを誓う。

第5条

当作戦本部としてはロマンティック連邦によってライプチヒのフォールが選ばれる。

第6条

諸強国の供給分担は次の如く定められる。ドイツ、スイス、オランダは二折判を供す。イギリスはパンフレット、ロシア、プロシア、スエーデン、オーストリアは

哲学、形而上学論文。最後にポルトガル、スペイン、イタリアは諷詩詩・警句詩・^{サテール エピグラム}
ソネット
14行詩を供す。

第7条

なおかつ、同盟諸強国間には次の事項が決定同意される。Sismondi 氏はパリ一
で表題は「南部欧州文学論」ハツ切版、3巻本の作品を発表喧伝する。Mme de
Staël は同じく、ハツ切版3巻本の作品「ドイツ論」を。一方 Schlegel 氏はジュネ
ーブにて指導し、ハツ切版、3巻本の新兵力、「演劇論」をスイスを通してフラン
スに侵入させること。Kotzebue 氏に関しては、彼は連邦本部にとどまり、新聞・
パンフレット・誹謗文を通して大衆に適当と思われる衝撃を与えること。

第8条

フランス語のもつ純粹さを永久に失わせるために、またフランス語が最も知的
な、最も明解なものとして外交官達に用いられることを阻止するために、Mme de
Staël-Holstein と Benjamin Constant 氏はフランス語で書くが、北方の諸国語のもつ
すべての曖昧さを自分の文体の中にとり入れることを誓約すること。一方 Sismondi
氏は自分の文体に、南方の諸国語の誇張した文体と気取った表現法を導入するこ
と。しかも、それをフランス人が彼等の間でも最早気付かなくなる迄行なうこと。

第9条

本条約は最も短期間内に批准される。よって各全権委員はこの文書に署名、彼等
の軍隊の官印を捺せり。

ロマン派文学強国参謀本部にて。5部、コペー、1810年3月1日

以下署名

以上で、1814年にフランスで刊行された、主なる新聞雑誌に見られる両派の動きを見て
来たが、この他にイギリスで刊行されている Edinburgh Review などにも「ドイツ論」に
関する James Mackintosh の重要な論評がある。Mackintosh は Mme de Staël の作品は
彼女の génie の驚くべき成果であり、女性の特質が現れている最高の作品であると激賞し
ている。しかし古典派文学とロマン派文学の区別については同意していない。彼は北方・
南方と云う民族主義的区分よりも、歴史的宗教的考察による区分の方を適切なものとみて
いる。

さて、全般をふりかえって見ると、その中から特色と思われる点が纏められると思う。ま
ず、4月のナポレオン退位までは古典派の反撃も専ら外国人である Schlegel と Sismondi
に向けられていた。(Journal de l'Empire 紙の Dussault の「Sismondi 論」、Nodier の

「Schlegel 論」や Gazette de France 紙に於ける Sévelinges の「Schlegel 論」と Esménard の「Sismondi 論」.)

帝政崩壊の動搖期には古典派までが、ナポレオンを外国人とみて、皇帝に最後まで敵対した Mme de Staël を迎え入れた。そして王党派の陣営で「ドイツ論」のフランス版を出版したこと。しかも6月はじめ迄は「ドイツ論」に対する攻撃は見られなかった。

しかし、政変が鎮まり王政復古もなり、7月8月に入ると、フランス文学界は再び騒ぎはじめ、古典派が他国文学の排斥を開始し、「ドイツ論」も攻撃の目標にされた。(Dussault の「ドイツ論」批判や、Quotidienne 紙上の「ドイツ論」攻撃。)しかし古典派は攻撃しながらも、ロマン派が次第に強力になる不安を覚えた。Schlegel, Sismondi の教理を歓迎するフランス人は殆んどいなかったが、Madame de Staël の「ドイツ論」に対しては、時たま賛美者が現れ、彼女の弁護に当った。(Mercure de France の Marcel de Serres と Mlle V. Cornélie de Salm. Spectateur の Malte-Brun, 或はイギリスの Edinburgh Review の Mackintosh.)

10月に入ると Mme de Staël の強力な味方が現れる様になる。(Académie des jeux Floraux の A. Soumet と Journal Général de France の Deleuze.) また、中立の立場で両派を紹介する新聞もクローズ・アップされて来た。(Journal Général de France の創刊)

11月から12月にかけて、古典派は再びロマン派を打破せんとして、Antoine Jay の講演や Nain Jaune の“Traité d'Alliance”の記事を発表する。しかし古典派の攻撃には皮肉や嘲笑を武器とする短評が多く、ロマン派に決定的打撃を与える大作は遺憾ながら1814年には出版されなかった。唯一の大作 Saint-Chamans の“L'Anti-Romantique”は1814年に大体書き上げられていたらしいが、これは1816年に発表された。

こうしたロマン主義の出発から序々に成長して行く、その間の歩みとそれに対する古典派の阻止対策を Toreinx は1829年の作品“Histoire du Romantisme en France”の中で次の様に手ぎわよく纏めている。“Dès l'enfance du romantisme (un peu pétulante à la vérité), de nombreux ennemis se liguèrent contre lui: ainsi qu'Hercule, de hideux serpents cherchèrent à l'étouffer au berceau; MM. Dussault, Geoffroy, Hoffmann, etc., ont grandement persécuté sa jeunesse... Inutiles tentatives! malgré leurs efforts réunis, malgré les saillies de la colère et les traits du ridicule, le dirai-je? malgré les arrêts de proscription d'un pouvoir à qui rien ne résistait, il a vécu, il a grandi.”

主なる参考文献

Pierre Moreau; Le Romantisme, del Duca, Paris 1957

“ ; Le Classicisme des Romantiques, Plon, Paris 1932

René Bray; Chronologie du Romantisme, Nizet, Paris 1963

Egglé et Martino; Le débat romantique en France 1813-1830, Les belles lettres, Paris 1933

Mme de Staël; De l'Allemagne, (Les Grands Ecrivains) Hachette, Paris 1958

- Charles Bruneau; Histoire de la Langue Française, tome XII, Armand Colin, Paris 1948
Jules Marsan; La Bataille romantique, 2 vol, Hachette, Paris, 1912, 1925
Van Tieghem; Le mouvement romantique, Hachette, Paris 1912
Michaud et V. Tieghem; Le Romantisme, Hachette, Paris 1952
G. Charlier; Le sentiment de la nature chez les romantiques français, Paris 1912
Saint-Chamans; L'Anti-Romantique, Lenormant, Paris 1816
Mariette Held; Charles Nodier et le romantisme, Berne 1949
Toreinx; Histoire du Romantisme en France, Dureuil, Paris 1829
Sainte-Beuve; Oeuvres, tomes 1 & 2 Bibliothèque de la Pléiade 1956

編 集 後 記

去る昭和33年度の総会において当支部の会誌は学会誌として認められ第1号が34年12月に出てから号を重ねて今年第5冊目第8号を出すことになった。支部の会員が少数であること、財政が豊かでないこと等もあって合併号と称して第2号以後は2号ずつ一冊に縮めて出してきた。国の財政々策は無策のまま物価高が放置されて、その影響がこんな所にも現われて来たのを見ると、今更ながら政治というものの重大性がひしひしと感じられる。支部学会で発表された研究はその年毎に発行したいのは全会員の願いであり、ついに昨年からは積立金を増額して今やっとここに第8号を出せたことは一入めでたいことと思う。本号には昭和40年11月21日松山商科大学で開かれた第8回支部学会で発表された研究を収録した。

広田喜作教授は昭和41年3月末にて松山商科大学を定年退職なさるに際して40年度の支部学会を松山商大で開いて下さったことを深く感謝すると共に、広田先生の御好意にこたえるために九人の研究が発表されたことは、この記念すべき松山学会を飾るにふさわしいものであった。これまた感謝しなければならないことである。

広田先生は御在任中松山で三回も支部学会を引受けて下されその都度大いなる御配慮を頂いたことは支部の発展と、支部の地域における斯道の隆盛を招く大きな動因となった。このことは特記して後世に伝えるべきものと思う。御退職後そして他の地にお住みになった後も支部会員として御援助下さる由で、全会員等しく感激し先生の御健勝を心から祈ってやまない。

毎号のことながら会誌発行に御協力下された広告主と、採算を度外視して、フランス語の研究を支援され、会誌の印刷を引受けて下された大学印刷に心からの謝意を表する次第である。